

詩の部

選評

まえだ かずき

市長賞

和英 当用国語新辞典 四ツ山 宮崎 悦子

この辞典をめくると

父さんが横にいる

昭和……年三月二十日 発行

定価二五〇円 税金も付かず

小豆色風で 片手で持てる

今なら マスク七枚入り

週刊誌やタバコは無理 ペットボトル

ガム 切手(一シートも無理)

字は小さい 五〇八頁(一八五〇字)

表紙から二枚目に 父の実印

仮名使い 漢字 意味

英語(スペル付) 行書体が

一列に羅列され とても便利

所所に挿絵が入る

家業の左官と炭坑勤め

無学な父は

叔父に(父の弟)叱咤激励され

いくつかの 資格・免許取得のため



夏は団扇片手(一台の扇風機は私達)
冬は掘り炬燵で……

よく、勉強をしていましたね

その横に いつもこの辞書があった

早婚の私に(嫁ぎ先の辺りに書店がなく)

何か分らんこつがあったら

見たらよか“と譲ってくれ

いつの頃からか 大いに役立つ

ちよい見で 子供達の思わぬ質問に

知ったか振りをしたり……

物の教え方 干支と時刻 方位

季節の挨拶 手紙の書き方

ラストには 花ことばもあります

けど、父さん 今はスマホに電子辞書

パソコン等 早い 多種多様です

それでも 時折 父さんの辞書をめくります



(評) お父さんから譲り受けられた辞典、開く度に

お父さんへの思いが伝わって来る。

構成のしつかりした詩だと思えます。

議長賞

くじら雲

本井手

石橋

和枝

澄みきつた青空

田圃の畔道に彼岸花の群

稲穂はすすく育つて

秋の風景を楽しみつつ

下校時の小学生を見守り帰る

空を見上げ雲の変化に

あの雲は鳥、ソフトクリーム

東の雲はメロンパン

いや顔みたい

あれが目、その下が鼻、口

あつ、飛行機雲

三本もあるよ

どこへ行く飛行機かな

東京、北海道、沖縄

アメリカ、アフリカ

色々と想像する子供達

楽しい下校となる

あの雲は何に見える

大きいからくじら雲だよ

一年生の教科書の

くじら雲を思い出して

呼んでみようよ

「おーいくじらぐも」

「おーいくじらぐも」

何回も呼びかける

雲は風に流され散り散りに

少しずつ消えてゆく

くじら雲と別れ

家路へ向かう子供達

笑顔があふれている

子供達の心にふれ

私の心に光が差し込む

(評) 詩情ある行間からほのぼのとした小学生さん

との交流が目に見えるように感じられます。



教育長賞

ある日

府本

秋野

しほり

母、九十六才

散歩がてらの草取りで病知らず

子等は仕事一筋の五十代四十代

孫は新婚さんから小学生までさまざま

曾孫、一才とゼロ才

一歩、歩いて拍手、拍手、

そんなある日、

絵を描いていた夫のふらつき

「ちよつとあの世を見て来た」

冗談を言わない人の冗談

二回目のワクチンの直後

市民病院の先生から

そのまま来て下さいとの電話

即入院 即手術

病名 洞徐脈（不整脈）

手術 ペースメーカー移植



手術終わって面会五分

顔を見て言葉交して帰宅

それから退院までの九日間

面会禁止

最小限の省略メール

やっと退院

少し色白になって

胸の傷が赤い

冗談は言わなくていい

畑から帰って

絵を描いて

テレビの前でんと居ればいい

みんながそれぞれの

自分の一日を過ごせばいい

（評）コロナ禍の中、社会性があり、メッセージが伝わってきます。ご心配なされたことでしょう。



文化協会会長賞

曼珠沙華

水野 川辺 華

お彼岸が近づいて来ると 一本二本と
次つぎに真直ぐな緑色の茎がでる
どこそこに咲き 畦に咲く 彼岸花
天上へ咲く赤い花

子どもの頃

沢山摘んで花瓶に活けると

曾祖母は何を想い

死人花とも言うけんね!!

打身の湿布に使ったことも

燃えるような真紅の群生の曼珠沙華

七ツ森古墳の古人の眠る丘

すれ違ふ一期一会の

おんなの貌が 皆きれいに見える

天上へ咲く曼珠沙華

夕ぐれの曼珠沙華は西国浄土

いつの間にか彼岸の父と糸電話



(評) 曼珠沙華の美しさを膨らませた作品。
彼岸の父と糸電話いいですね。

熊本日日新聞社賞

愛の残像

西原 松村 静子

愛が落ちてゆく

両手いっぱい愛が砂のように

抱きかかえても 指の間から

音もなくさらさらと消えてゆく

魂の叫びを のみ込んで

愛が壊れる時

人は悲しみの涙を流す

熱い涙を 愚かな涙を

希望は絶望へと

夢は幻へと姿を変え

私から飛んでゆく

砂嵐の中に

わたし独りを残して



(評) 無駄のないことば運び、行間から伝わって
来る情感は胸を打ちます。

秀作

校門の桜

平井小六年

石橋 惇晃

校門の桜が

満開に咲いた

六年生の卒業式

お祝いをしているようだ

桜の花びらが散りはじめるころ

一年生の入学式

花びらがランドセルの上にも

入学を祝っているみたい

夏休みが終わり

二学期が始まる

二十本ほどあった桜の木

切られてる

一本もない

空がいつもとちがって見える

ぼうぜんとして教室に入る

老木となって危ないから切られた

と先生は言っていた



切り株から水があふれ

ぬれている

ないてるみたいに見えた

少しさみしくなった

いままで平井小のぼく達を

祝ったり見守ってくれた桜

ありがとう



(評) 長い間見守ってもらっていた校門の桜

との別れ、感慨深いものがあります。いい詩が出来ました。

茶畑

本井手

石橋 和枝

初夏の日差しを浴びる茶畑

早緑の一文字の畝々

緑したたる茶畑

ゆらゆらと若葉を揺らす風

柔らかい茶葉の声を聞くように

一葉一葉摘みゆく人々

ほととぎすの声

終日茶畑の賑い

初夏の風景

幼き日

一家総出の茶摘み

畑隅に野苺の花

乾いた喉は若葉の茎を食む

じんわりと新茶の香り

喉をうるおしてくれる

なつかしい光景が浮ぶ



初冬の茶畑

かぐわしい白い花を付ける

一步畑に入り

しばし佇む

冬の間は深い眠りに入る

春を待つ茶畑

茶作りの喜び悲しみ

全て糧となす茶畑

玉露育む村よ

故里奥八女

したたる緑の茶畑

春日照りいる



(評) 八女の茶畑が目に浮かびます。

玉露が飲みたくなりました。

秀作

老いた私と現代の機々

川登

杉本

悦子

スマホをあけて見る。メールが入ってる
どこをどう押すんだっけ？ やっと出た。

「ばあちゃんスマホ慣れた？早く覚えてね」の
メール。もらったらず返すんだよと息子、
どう押してするんだっけ？教えてもらった時

「わかった」と思ったけど一人になったらもう頭
はまっ白、やっと「心配してくれてありがとうと。

なんとか頑張るから」と返信した。どこでもに
ぎったら駄目、横についてるスイッチをいつ
のまにか押ししたりするから用心して、覚えた
ら便利だから、やる気を出してするかだよ。と
息子。小三の孫に宿題を先にすませておこう
ねと言ったら「うん」と言っただけよりタブ
レットを出す。「えープリント用紙じゃないの
？」もう私達年寄りの出番はなくなった。こ
の間、テレビでオリンピックをみてた時、あ
の人達どこの人と試合してるのかなとつぶや
いたら、マークをみてスマホでさっと調べて
「ジャマイカの人達だよ」と小五の孫。「ばあちゃ



んスマホで調べるとすぐ解るよ」と… 簡単に
いうけどすぐ忘れてどこを押すんだったか、
どのマークの所を押したらいいのか悩む日々。
盆に里帰りした四男がスマホにぎってじつ
と見ている。何をみてるかと思ったら「幕末
時代の小説を読んです。これがあるからわざ
わざ図書館にいかなくてすむし、便利でいい
んだと言う。二人の孫達はゲームでスマホで
遊んでる。もう一人の孫は遠くにいる友達と
ゲーム。そばにいらなくてもしゃべりながら
充電機さえ持っておけば。世の中変わったな私
の子供時代とは……。お母さん、昔外国旅行にい
った所をスマホでもう一回まわるとでてる
よ、思い出してまわったり、ナツメロでも聞
いて人生を楽しまんねと言う息子。
外にでて草取りしてほっとする。世の中変わった。
コロナもあるし、あと二、三年でどうかわる？
息子や孫のいる現代についていきたい。私。
シワにムチうって……。

(評) スマホとの格闘はなかなか難しい問題です。
子供にとつていいのか悪いのか考えさせられます。

佳作

閉じた窓

西原

松村 静子

今日もその窓は閉じたまま

若い夫婦が住んだのは

たったの三ヶ月

増築費は老いた農夫の背に

老いたふたりはだまつて

今日も地下足袋を履く

三ヶ月でも一諸に住めたと

静かに笑つて

夏を待ち秋が過ぎ

冬を迎えても

今日も窓は閉じたまま



(評) 若夫婦と年寄りが生活するのはどこも難しい
ようです。窓が開くのをまつています。

選者作品

目づめる

眠りが浅い夜明け 重い足取りで
バス停近くの赤いポストに向かう
歩道橋の上を歩いていると暗闇の中に
川が流れる音が聞こえてくる
コロナ禍 集中豪雨を心配して
陣中見舞の手紙をハトからもらっていた
返事の手紙を投函しての帰り
足はまだまだもたついていて
二回目のワクチン接種を
打ち終わりで安心しました
八月の豪雨は被害を
免れよかったですと書いておいた
二三日もするとハトのもとに届くだろう
昨年七月の豪雨被害に泣かされた
ようやく堤防仮復旧工事も済み
土砂が流れ込んだ
田圃の稲も夜風になびいている
夜虫の鳴き声を聞きながら
畦道を歩いていると



昨年聞けなかった
カエルの鳴き声が
久しぶりに聞こえてくる
グアグア・・・グアグア
グアグア・・・グアグア
山里に明かりが点ると
森の方から白みかけてきた



選考を終えて

今年度の作品は建設的な作品が多くて、読み応えがありました。コロナ禍の中、これからの世界は混沌と不確実な時代だそうです。皆さんの心中に新しい言葉が芽生えるよう……
来年を楽しみにしています。

短歌の部

選評

田中 滋子

市長賞

川登

長曾我部

明照

ひい孫はひいじいちゃんが好きだよと

読めぬ字を書き我に読ませる

(評) ひい孫とひいじいちゃんの「ひい」という言葉がとびかかって楽しそうなお二人の情景がみえるようでほほえましく感動しました。決してうまい歌ではありませんが、からずも韻を踏む構成はみごとです。

議長賞

平井小四年

石橋

洗季ひろとき

一日中大きな口はマスクなし風とおしゃべりするこいのぼり

(評) 「大きな口はマスクなし」と上の句で止めた表現は見事です。一日中マスクをしている生活と自粛という日常なご 생각이こめられていますね。少年らしい発想がしゃれた詠みになりました。

教育長賞

荒尾第三中二年

石橋

正教まさみち

将来の夢に向かい背を伸ばすたどりつけない中二の僕は
(評) たどりつけない中二のぼくの痛々しい程の心の叫びを感じます。まっすぐに懸命にがんばっているからこそ言える表現だと思いました。

必ず将来の夢が待っています。

文化協会会長賞

荒尾

中山 和

ドクダミの白き十字架八月の庭で不戦の誓い新たに

(評) 漢字の多用がより作者の意志をつよめ巧みな歌に仕上がっています。また、カタカナ使いのドクダミという置き方もいいですね。

熊本日日新聞社賞

一部

松井 和子

春嵐風が体の真ん中を濾過するごとく吹き抜けていく

(評) 嵐と風という字を続けて強調された風に自身をゆだねている思いがすてきです。「濾過するごとく」が活きています。

秀作

平山

坂本 裕子

空見上げ自粛の日々に待ちぼうけ冷凍庫には子らの好物

秀作

西原

西嶋 英子

瀬戸海に六十年の文の束船の窓よりさよならをせり

秀作

平井小四年

田代 璃子りこ

雨上がり雲の間ににじが出た空も林もきらきら光る

佳作

万田

坂田 峯子

コロナにも負けじとワクチン接種終え炎天の下草取りに励む

佳作 平井小二年 石橋 理香子りかこ

おぼんにはかえってくるよおじいちゃん
しゃしんじゃなくて会いたかったよ

佳作 下井手 古賀 ハルミ

柳川に嫁ぎ来し甥の花嫁さんどんこ船に乗り川上りゆく

佳作 平井小四年 庄山 瑠那るな

友達といっしょに遊び転んだら助けてくれるやさしい友は

佳作 平井小四年 吉本 美桜音みおん

家でかう猫が大好き可愛くて一緒に遊び頭をなでる

選者詠

庭畑の草とり終えて汗ばみし手足に流す水音涼し

選考を終えて

自粛の日が続き歌詠む思考がかえっておろそかになったの
でしょうか。出詠者十六人は大変残念に思います。

しかし自然は、変りなく動き私たちに刺激を与えてくれ
ています。それをつかみとりましょう。生きている証しと
して表現してゆきたいと思っています。

一緒に短歌を詠みつづけてゆきたいと思っています。

肥後狂句の部

選評 吉本 五男

市長賞 野原 谷口 英絵也

落ちつかん 地震の続く 肥後の国

(評) 四年前、震度七、五という大地震、未だに恐怖が
身に染みんでいます。又何時来るかと、落ち着かん日々
を過ごしているものです。

議長賞 四ツ山 岩山 光義

朝飯前 氏神拝む 卒寿母

(評) 私の亡き母を思い出しました。毎朝起きて直ぐ
神棚と仏様に拜んでいました。「氏神に拜む」には感銘
しました。

教育長賞 宮内 西山 としお

朝飯前 児童見送り 出ていかす

(評) 着眼点がいいですね。児童生徒の登下校を、交通
事故から守る日課に感謝します。

文化協会会長賞

菰屋

岡村 ゆき子

落ちつかん 私の番が すぐそこに

(評) 子供の時の発表会、就職面接 あるいは、

息子の結婚式の最後の挨拶、貴方の番は、直ぐですよ

熊本日日新聞社賞

大牟田市

藤枝 照代

落ちつかん コロナの記事が まだ減らん

(評) 毎日毎日コロナコロナで、マスクを外す日がいつ来るのかと辛抱強く待つしかありません。

秀作

川登

山本 良輔

あとの祭り 好きが云えずに 五十年

秀作

宮内出目

前川 幸子

あとの祭り メール気づかず はってかす

佳作

増永

前川 久美子

落ちつかん わが子の声が もう聞ける

佳作

増永

太田 清美

朝めし前 草取りしてる 義母がいる

佳作

本井手

黒木 秀哉

後の祭り 賭け事はまり 泣き事に

佳作

増永

横尾 節子

朝めし前 変わらないかと 娘がいう

佳作

中央区

松田 司

後の祭り 息子ち思い 振り込んだ

選者吟

朝めし前 ラジオ体操 欠かっさん

※ 投句者 十二名 三十六句



川柳の部

選評

松村 華菜

課題 「夢」

市長賞

荒尾

中山 和

夢ひとつ心に翼抱いている

(評) コロナ禍の鬱積した今、人は身も心も閉じている。その中であって「心に翼抱いている」の力強い表現が魅力的で、生きるエネルギーが込められている。

議長賞

緑ヶ丘

松尾 末子

百回の献血目指し夢叶う

(評) 百回の献血、何年もかけての夢の達成、にんげんの素晴らしさ、人間讃歌だ。人を救うための献血、何と尊い事だろう。

教育長賞

牛水

岸本 瞳

晩成を夢見て初心抱き続け

(評) 夢を描くことは容易なことだが、それを叶えるのは大変なこと。晩年になるまで努力しつづけることへの心意気が伝わってくる。

文化協会会長賞

増永

前川 久美子

樺掛け墨たっぷりの夢の文字

(評) 体育館等の広々とした中で樺に白足袋、大筆

で身体いっぱい「夢」と描く、句の中に生々

とした作者の姿が躍っている。

熊本日日新聞社賞

長洲町

濱北 葵

喜寿の春夢はここから今が旬

(評) 「夢はここから今が旬」何と元気が出る言葉だろう、喜寿を出発点と言いつ切る作者に拍手、人生の応援歌が聞こえる。

秀作

増永

太田 清美

子育ても終り軸足夢に向け

秀作

荒尾

田中 悦好

為せば成る大きな夢を一つ持つ

秀作

中央区

松田 司

夢さがす明日への努力おしまない

佳作

川登

山本 良輔

近未来宇宙旅行も夢じゃない

佳作

荒尾

中村 千鶴

夢叶い看護の使命胸に秘め

佳作

増永

横尾 節子

余生なおまだまだまだと夢を追う

選者吟

夢を見ていた男の揺らすブランコで



俳句の部

選評

大川内 みのる

萩の風が神にそつと触れていく。情のある句。

市長賞

東屋形

二村 和子

熊本日日新聞社賞

一部

西村 安子

復興の阿蘇大橋や鴟高音

人影の長き干潟や秋没日

(評) 熊本大地震により大橋は崩落。五年後の今年新大橋完成。 鴟の声は県民の歓声とも。

(評) 潮干狩か海苔簀の準備か、沖の人影が刻々と長くなる。秋の日は釣瓶を落す様に暮れる。

議長賞

本井手

豊島 キクエ

秀作

菰屋

園田 夕子

彼岸花日暮れの色に紛れけり

水害の線路そのまま秋の風

(評) 燃える様な色が黄昏に包まれ、漆黒の闇に沈む。刻々の時間の経過が見てとれる。

秀作

東屋形

白浜 ゆき

竹ぼうき休めし頬に秋の風

教育長賞

金山

橋本 恭

秀作

大和区

坂口 三千代

雲去りぬ豪雨のあとの月清し

波音の近き宿坊良夜かな

(評) 今年は二度の豪雨に自然も人も被害を受けた。月はそ知らぬ様に皓々と輝いている。

佳作

府本

荒尾 孜

赤蜻蛉青田を見れば母想ふ

文化協会会長賞

樺

荒木 莉花

佳作

西原

尾上 由佳

萩の風石の祠に石ひとつ

未来の色問はる素風の通学路

(評) 朽ちる事のない石を、神として祀ってある。

佳作

川登

小島 敏一

秋雨に濡れて一句の筆滲む

佳作

菰屋

園田 則幸

ひとひらの笹舞ひ落ちる秋の朝

佳作

八幡台

菜切川 まや

中秋も「無味無臭」との便りかな

選者吟

白は姉赤は父母曼珠沙華

堺 博之

断層は大地の継ぎ目渡り鳥

大川内 みのる

反戦を綴りつづりて百日紅

徳山 直子

片袖はまだ蕾なる菊人形

荒尾 かのこ



少年少女俳句の部

選評

荒尾 かのこ

ゴールド賞

府本小五年

荒尾 快晴

法師蟬リズムにのって歩くぼく

(評) 法師蟬が鳴いていて、自分の歩き方がその

リズムにのっているとは発見です。俳句にもリ

ズムがあつて、みごとです。

ゴールド賞

中央小三年

東 りく

まどの外つくつくぼうしぜつきょうだ

(評) せみの声を「ぜつきょうだ」と、とらえたのは、

何でも一生けん命に立ち向かっているからこそ出

たことばで、力強い句となりました。

ゴールド賞

平井小二年

石ばし りかこ

うんぜんだけふわふわ雲の夏ぼうし

(評) うんぜんだけをいつもかんさつして今日

うんぜんはふわふわの夏ぼうしとよみました。

とてもいい句です。

ゴールド賞

中央小六年

田中 莉緒

赤蜻蛉しばらく並んで歩く夕

(評) 赤蜻蛉と並んで歩くとは、きつと幸せな夕方の

ひと時だったことでしょう。

やさしさと楽しさのあふれる句です。

ゴールド賞 中央小三年 田上 いおり

秋の山だんだん色が変わるんだ

(評) 山の色が少し黄色くなっているのに感動し、

これから真っ赤や黄色になるのが、楽しみ。

かんさつしていてみごとです。



シルバー賞 緑ヶ丘小四年 赤崎 ゆい

なに色の花がひらくかほうせんか

シルバー賞 中央小五年 東 海生斗

山の木にびっしり生えているきのこ

シルバー賞 高道小四年 畑 実希

かまきりに左の親指かまれたの

シルバー賞 府本小五年 橋本 和夏

紅葉のはじまっている桜の木

シルバー賞 中央小二年 大塚 灯夏

夏の川体のぜんぶひーんやり

シルバー賞 平井小四年 石橋 洸季

なみだ目になっていないよおぼろ月

シルバー賞 荒尾第一小五年 清野 紗代

豊作の時期がくるときむねおどる

シルバー賞 海陽二年 栗山 奈緒

行書の日雲がかかった月が好き

シルバー賞 中央小六年 塩地 世奈

三角に切ってシャリシャリ西瓜食ぶ

シルバー賞 中央小五年 小宮 優芽

きのう咲いた朝顔今日は咲かないの



選評

シルバー賞の皆さんも、目で見て、耳で聞いて、鼻でおいを感じ、舌で味わったり、皮ふで感じたりしたことを句によんで立派です。これからもどんどん作って下さい。